晩 夏 光 顔 失 S 7 す n 違 Š

雁

渡

夕

餉

0

早

き

漁

師

町

と ひ L ζ,, ぼ 5 う L 13 0 لح 坩 堝 لح K N 村 好 0 か 老 n 13 ベ 13 け] 帽 ŋ

亜紀の地表を来たる鬼やんま

も 出 口 も 曼 珠 沙 華 盛 ん

ひ

と

 \Box

は

銀

漢

13

噴

<

ゥ

オ

ッ

力

か

な

入

n

 \Box

白

稲刈りが済んだ田圃の畦に曼珠沙 稲刈りが済んだ田圃の畦に曼珠沙 していることもあり、咲き揃うと見事である。私は村はずれの墓地の周りで、ある。私は村はずれの墓地の周りで、朝に烏が騒いでいると、「今日は烏朝に烏が騒いでいると、「今日は烏朝に烏がいたような所で育った。それだけに曼珠沙華も不吉な花という気持ちだった。

創刊の の前、 華の名所を訪ねたり、様々な地で花 が掠れてゆく様に滅びの寂しさを感 してやがて花に疲れが見え始め、 に行く度に見つめることになる。 る。そうなるとポストに朝刊を取り き出すように、瑞々しい茎が出現す を眺めた。ここ数年では我が家の門 わったのである。それ以来、 たす〉の句以降は、 それがどうして、 思わぬ所に地面から両手を突 〈曼珠沙華天のかぎりを青充 華やかな花と変 登四郎先生の沖 曼珠沙